



## “見る目がある人”の条件

株式投資やFX取引、あるいは映画でも本でも何でもいいのだが、「これはイケる」と思っていたものの、蓋を開けてみれば期待外れだった、という経験をお持ちの方は多いのではないだろうか。いわゆる“見る目”の話だが、「私は見る目がない…」とお嘆きの方は、以下の問題が参考になるかもしれない。

「その潜行性の不治の病は1万人に1人の確率で発症すると言われている。そして今、この病気に罹患しているかどうかを判定できる検査薬が発明された。罹患者がこれを使うと、99%の確率で陽性反応を示す。しかし、罹患していない人が使った場合でも、1%の確率で誤って陽性と判定されてしまう。

【問題】さて、あなたがこの検査薬を使ったところ、何と陽性の反応が出ってしまった。あなたはこの結果を真に受けるだろうか？ この検査薬を信頼できる—“見る目がある”ものとするだろうか？」

…実のところ、あなたが病気に罹患している可能性は高くない。例えば100万人がこの検査薬を使用したとしよう。病気に罹患している人は100万÷1万=100人なので、99人に正しく陽性反応が出るだろう。一方、病気に罹患していない99万9900人の1%=9999人には、誤って陽性反応が出てしまう。つまり、結果が陽性であっても、実際に病気に罹患している確率は $99 \div (9999 + 99) \div 1\%$ に

過ぎない。この検査薬は“見る目がない”のである。

「99%罹患者を見分けられる」という、見た目上は高い判定能力を有していても、実際には精度の良い判定を行えない状況があることをお分かり頂けたであろうか。この齟齬は、全体に占める非罹患者の割合（ $100\% - 0.01\% = 99.99\%$ ）に比べて、非罹患者を正しく見分けられる精度（ $100\% - 1\% = 99\%$ ）が粗すぎることに起因する。この結果が示唆するところは、本物を本物だと見分けられる能力のほかに、全体の中に偽物がどの程度あり、そしてそれに見合うだけの偽物を見分けられる能力があるか、という点も判定精度に大きく影響を与える、ということである。

冒頭の株式投資を例に挙げれば、「～のような株は値上がりする」といった類の話はよく耳にする。一方で、大きく値上がりするような優良株は僅かしかない、という観点に立てば、その他大勢の値上がりしない株をどれだけ精度良く判定できるか、という事がより良い投資—“見る目がある”ということに繋がるのかもしれない。

最後に、男女間でよく言われる「見る目」について言及したい。この場合、幸いなことにあなたの心持次第で本物の数を増やすことができる。判定能力に磨きをかける前に、少し“理想”を下げてみては？

(須貝 悠也)

